

# 「お金よりも 言葉を遺す」の方が 大切です」

田園調布の生みの親。日本郵船や帝国ホテル、札幌麦酒など  
日本を代表する企業の創立に尽力。「日本実業界の父」渋沢栄一は  
まさにリアル・リッチ。だが子孫に美田を残さなかつた。

富は独占するより  
永続することに  
価値がある

米系の大手ヘッジファンドに勤めて、投資家のおカネをいかに上手く運用するかという仕事を、米国と日本で通算で5年間ほどやっていました。

現在は資産運用のコンサルタントとして、複数のファンドを組み合わせて投資する米国のファンド・オブ・ファンズ（日本の日本における業務推進や国内の様々な運用会社の顧問等の仕事をしています）。

独立してから以前と比べて、考えに大きな変化が生まれました。マーケットとにらみ合っていた時代では、仕事の視点は短期的に大きく儲けることでし

た。毎日が勝負の激しい世界です。今はそこに、横の時間軸を入れていきます。

つまり10年、20年、あるいは30年後の目線で収益を目指す世界に強い関心を持つようになったのです。そうなる自分の資産というより、次世代に何を残そうかという話になります。富を築くことを基に、その富を永続させるといふことです。

日本は、「ファンド資本主義」と呼ばれる時代に突入しました。これは、投資家から託されたおカネをいかに効率的・合理的に運用するかということです。簡単にいえば、いかに価格を

出すかということですが。

この投資の視点は、とても重要なことです。しかし、それが全てではありません。合理的に富を作ることができたとしても、それが必ずしも、「富の永続」にはつながらないかもしれないからです。

私に生じたこの変化は、ひとつは、子供ができたこと、つまり次世代のことを考え始めたことがきっかけです。もうひとつは、私の祖父の祖父、つまり4代前の祖先にあたる渋沢栄一の影響です。6年前に独立した私は、会社を起すにあたって、父が所有していた何十冊もの渋沢栄一の伝記や資料を読むことになりました。

より高く、時間をより短くして、成果を

## 渋沢健

シブサワ・アンド・カンパニー代表取締役

「500社も会社を立ち上げた人だ

profile……しぶざわ・けん  
'61年、神奈川県生まれ。渋沢  
栄一の5代目の子孫。UCLA  
経営大学院を修了、MBAを取  
得。JPモルガン、ゴールドマ  
ン・サックス、大手ヘッジファ  
ンドのムーア・キャピタル・マ  
ネジメントなどの外資系金融  
機関を経て、'01年、投資コン  
サルティング会社のシブサワ・  
アンド・カンパニーを設立した。  
他に渋沢栄一記念財団理事、  
経済同友会幹事などを務める



から、何か役に立つことが書いてある  
だろう」

と、初めて渋沢栄一本人が残した言  
葉に目を通しました。

そんな軽い気持ちで始めたのです  
が、途中から夢中になりました。「渋  
沢栄一の言葉」は、現代の日本に通用  
する普遍的なメッセージであること  
に気づいたからです。その「言葉」を  
少し紹介しましょう。

「富というものはうまくできていて、  
それを独り占めしようとするに永続  
しない」

「しかし、大勢の大衆の一人一人の富

の永続性を構築できれば、一つ一つの  
事業、そして地域社会や国の発展につ  
ながる」

渋沢栄一が大切にしていたのは「永  
続」でした。つまり、今で言うサス  
ティナビリティです。富を築くことを  
否定はしません。でも、「永続」の方  
がもっと大変で大切であることを自  
覚していました。そして、そのために  
必要なのは、中国の古典『論語』など  
に基づく道徳的な価値観であると説  
いたのです。

「日本資本主義の父」と呼ばれた渋沢  
栄一は、明治維新後の日本を「民営化」

によって活性化、世界の列強に伍して  
いける存在にしようとした。政府  
の力だけに頼ることなく、各地に拡散  
している「民力」を集めてインフラ  
を整備、産業を次々に起こしていった  
のです。

### なぜ 「論語と算盤」 なのか

その第一歩が、日本初の銀行となっ  
た第一国立銀行です。明治維新で大蔵

官僚となった渋沢

栄一は、米国の「ナ

ショナル・バンク」

を真似て、紙幣の兌換性を高めるために、銀行の設立を立案します。ところが、その直後、財政問題で内閣と対立、大蔵省を退職したために、初代総監(頭取)のポストが立案者の渋沢栄一に回ってきたのです。明治6年(1873年)、33歳の若さでした。

国の条例で成立したので「国立」の名がつけましたが、資本金は民間が出資しています。第一国立銀行の場合、大株主が三井組と小野組で各100万円を出資。渋沢栄一はその他

44万円のなかの4万円を出したのですが、両大株主が主導権を求めて牽制、それが経営権の空白を生み、ここに渋沢栄一の「据わりの良さ」もあって、以降、44年間も頭取を務める結果となったのです。

銀行頭取であると同時に、日本のベンチャーキャピタリストの元祖でもある渋沢栄一は、500社もの設

立に関与しています。なかにはすぐに解散するような企業もありましたが、王子製紙、東京海上保険、日本郵船、東京電力、東京瓦斯、東京石川島造船所、清水建設、日本興業銀行、横浜正金銀行、日本鉄道会社など、その後の日本経済



小学校2年生のときに銀行員である父親の転勤に伴い渡米。そのまま米国で過ごし、'83年にテキサス大学卒業

の礎となるような企業を数多く残しています。

財界活動の先駆者でもあり、東京商工会議所の創立に関わり、東京証券取引所の創立委員であると同時に、一橋大学、早稲田大学、日本女子大学、日本赤十字社、聖路加国際病院などの設立にも尽力しました。

こうして、近代資本主義に必要なインフラを「民力」によってすべて整えた渋沢栄一は、「富を築きたい」という人間の欲望を肯定した人です。そうでなければ市場は成り立たず、経済社会は活性化しません。

しかしながら、「利益の追求」に血道をあげたことを肯定する人ではありませんでした。彼の有名な「論語と算盤」という教えに、それは集約されています。「論語」に象徴される道徳的な価値観と、「算盤」という言葉に込められた富を生み出す計算を、うまく融合させなければ「永続」はないのです。

「企業の社会的責任」が一般に認識されたのは21世紀に入ってからのこと

ですが、100年以上も前に渋沢栄一はその概念を理解していたといえます。

## 16分の1の血と叡智を残してくれた

人が望む「富の永続」に貢献したいと考えている私は、長い時間軸で企業と対話できるファンドの創設を考えています。想定しているのは個人投資家であり、プロの機関投資家ではありません。

個人は生活者であり、その生活者の知恵の集積が、「長い目で企業を応援する」というスタンスで、企業を成長させる。そして、投資家に長期的なリターンを「お返し」という考えです。私にとって渋沢栄一は、16分の1の血を与えてくれた祖先のひとりであり、かありません。また彼は、三井、三菱と並ぶような財閥を築けたのかもしれませんが、結局、子孫に美田は残していません。

ですが、渋沢栄一は現代の日本に通用する数々の言葉を遺してくれました。明治の大実業家である彼の言葉に説得力と含蓄があり、メッセージ性が高いのは事実ですが、私は誰もが子孫に向かって、あるいは後世の人々に、自分の言葉を遺すべきだと思っと思っています。

「富」は女にもおカネだけではありません。その人間に叡智が備わっていれば、叡智もまた貴重な「富」として「永続」させるべきだと思っております。